

多賀城市文化財調査報告書第52集

# 高崎遺跡

— 第22次調査報告書 —

平成10年3月

多賀城市教育委員会

# 高崎遺跡

—第22次調査報告書—

平成10年3月

多賀城市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は平成9年度に実施した高崎遺跡第22次調査の成果をまとめたものである。
2. 遺構番号は第1次調査から一連の番号を使用している。
3. 本書中で使用した遺構の分類については以下のとおりである。  
SI : 壓穴住居 SK : 土壌 SD : 溝 SX : その他
4. 本書挿図中の実測基準線は「平面直角座標系X」を使用して設定した。
5. 土色は『新版標準土色帖』(小山・竹原:1993)を参照した。
6. 本書の執筆・編集は当センター職員の協力を得て、武田健市、堀口和代が行なった。
7. 遺物の整理に当たり、臨時職員の浦風志恵子、須藤美智子、陶山喜美栄、渡邊奈緒の協力を得た。
8. 発掘調査に関する諸記録および出土遺物は多賀城市教育委員会が保管している。

## 目　　次

I. 遺跡の立地とこれまでの調査成果	1
II. 調査区の地形と周辺の調査	1
III. 調査に至る経緯・経過	1
IV. 調査成果	3
1. 基本層序	3
2. 発見した遺構と遺物	4
V. まとめ	9

## 調　　査　　要　　項

1. 遺跡名　高崎遺跡（宮城県遺跡登録番号 18018）
2. 所在地　多賀城市高崎一丁目地内
3. 調査面積　1,000m<sup>2</sup>
4. 調査期間　平成9年4月14日～6月30日
5. 調査主体　多賀城市教育委員会　教育長 櫻井茂男
6. 調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所長 木村忠雄
7. 調査員　石本 敬、武田健市、堀口和代

## I. 遺跡の立地とこれまでの調査成果

多賀城市は市内を南北に流れる砂押川を境に、東側が丘陵地、西側が沖積地と大きく二分されている。丘陵地については松島丘陵から派生した塩釜丘陵と呼ばれるものであり、沖積地は宮城野海岸平野の北東部に当たる。

高崎遺跡は塩釜丘陵でも特に高崎丘陵と呼ばれる標高8～27mほどの底丘陵上に所在している。特別史跡多賀城廃寺跡を取り巻くように位置しており、高崎・留ヶ谷地区を中心に東西1.2km、南北1kmの広範囲を占めている。

これまで本遺跡では24次にわたる発掘調査を実施しており、古墳時代から江戸時代に至る遺構・遺物を発見している。これらの調査の概要は第1図のとおりである。

## II. 調査区の地形と周辺の調査

今回の調査区は多賀城廃寺の北東約200mの地点に位置しており、地形区分でみると高崎丘陵の北西端部に当たる。本調査区の地形についてみると、その大部分が標高20mほどの緩やかな北斜面となっている。この緩斜面は、調査区南西側から南東側一帯にかけて広がっており、多くの住宅が建ち並んでいる。一方、北側から西側にかけては急激な斜面となっており、対面する浮島地区的丘陵部との間で谷状の地形を呈している。

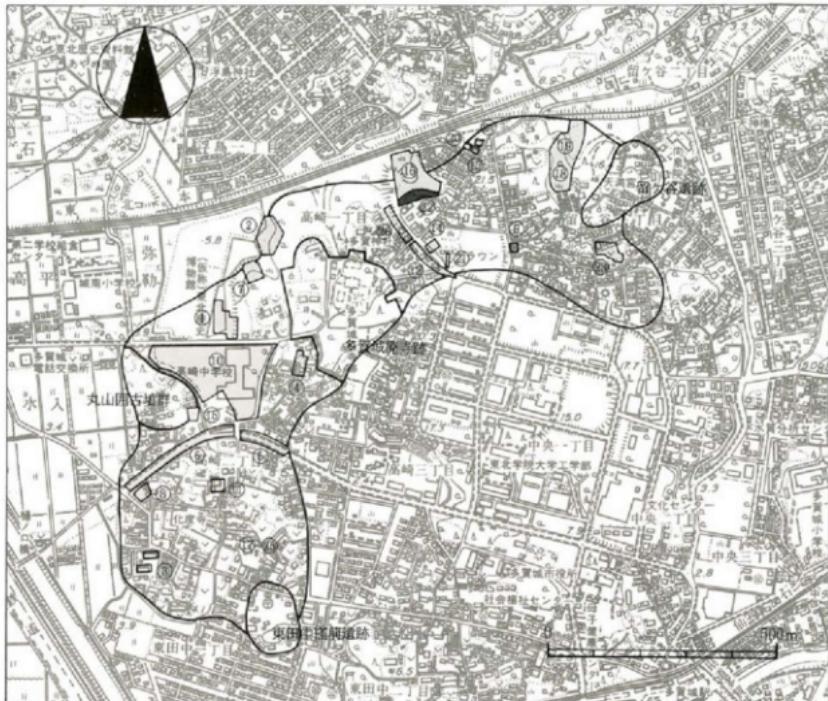
本地区周辺の調査では、北側に隣接して第16次調査を実施している。同地区では北東側から舌状に張り出した丘陵上で9世紀頃の掘立柱建物や堅穴住居を発見しており、本地区北側と同一の急斜面においては赤焼き土器が出土する土壌や溝などを確認している。

## III. 調査に至る経緯・経過

今回の調査は、多賀城市土地開発公社による宅地造成工事に伴うものである。工事計画については、本地区の大半を掘削して平坦にし、北側斜面については盛土造成するというものであったため、事前調査で対応する旨を提示していた。その後、平成9年2月13日に発掘調査の依頼が教育委員会に提出され、翌年度の4月8日に委託契約を締結した。

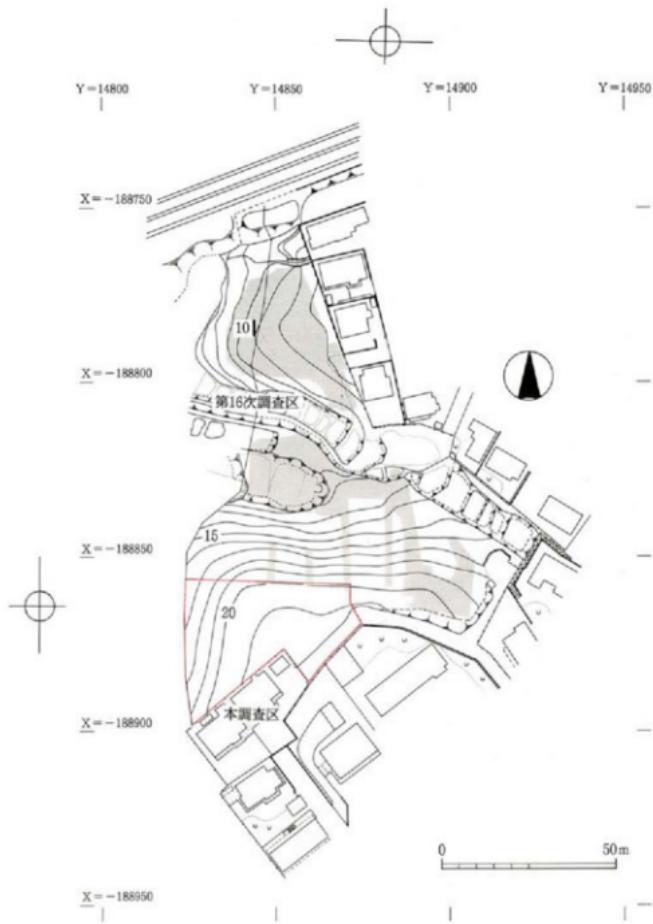
調査区内の現況については大部分が松、杉などを主体とする雑木林であったが、急斜面へ移行する北西から北東部にかけては凝灰岩質の岩肌が露出していた。発掘調査は、平坦面に植生する樹木の伐採および搬出後の4月14日から開始した。以下、その経過について列記する。

- 4月14日　　調査器材搬入。重機による表土除去開始。調査区にある樹木の除去（～5月中旬）。
- 4月15日　　調査区の精査。表土下の褐色土が調査区全域に広がる基本層序であることが判明。第Ⅱ層とする。
- 4月22日　　第Ⅱ層の除去開始。
- 5月7日　　第Ⅱ層の除去終了。遺構の検出作業を開始。
- 5月12日　　遺構検出写真の撮影。実測基準点の設置。
- 5月15日　　1/100、1/20スケールで遺構平面図の作成を開始。
- 5月26日　　遺構埋土の掘り込みを開始。
- 6月19日　　調査区の全景写真撮影。
- 6月25日　　調査区内に20cm間隔の等高線を設定し、1/20の平面図に記入（～30日）。
- 6月30日　　調査終了



調査次数	調査年度	調査地区	発見遺構	出土遺物	年代
1	第1次調査	昭和10年度 高崎地区	獨立柱建物、合口甕棺	土器窓、須恵器、大型石	平安時代
2	第2次調査	昭和16年度 高崎地区		土器窓、須恵器、赤繪土器、瓦	平安時代
3	第3次調査	昭和17年度 高崎地区	窓、土器、埋甕	土器窓、須恵器	平安時代
4	第4次調査	昭和20年度 高崎地区	柱列、窓、土器	土器窓、須恵器、瓦、風呂硯	平安時代
5	第5次調査	昭和20年度 高崎地区	獨立柱建物、窓穴住居、柱列、窓、土器	土器窓、須恵器、赤繪土器、瓦、円面鏡、鏡	平安時代
6	第6次調査	昭和61年度 高崎地区	獨立柱建物、窓穴住居、柱列、水田、合口甕棺、井戸	土器窓、須恵器、赤繪土器、青瓷、瓦、板、青磁、骨棒、實永造宝	平安・中世・近世
7	第7次調査	昭和63年度 高崎地区	獨立柱建物、窓、土器、地盤遺構	土器窓、瓦、白磁器、須恵器、土器、瓦片火鉢、カラマツ、實永造宝	平安・近世
8	第8次調査	平成3年度 高崎地区	窓穴住居物、井戸、遺構、土器、水田、道路	土器窓、須恵器、赤繪土器、青瓷土器、無輪陶器、鐵鍊、馬具鋒片	平安・中世・近世
9	第9次調査	平成4年度 高崎地区	窓穴住居、窓、土器		平安時代
10	第10次調査	平成5年度 高崎地区	施釉建物、窓穴住居、井戸、窓、土器	土器窓、須恵器、青瓷土器、云物陶器、瓦、石器、井筒器、鐵造鋒片	平安時代
11	第11次調査	平成6年度 高崎地区	窓穴住居、石棺跡、土器破片場	土器窓、須恵器、赤繪土器、灰陶陶器、綠釉陶器、青磁、瓦片土器、施釉陶器、丁飴、漆器皿	平安時代
12	第12次調査	平成6年度 高崎地区	獨立柱建物、窓穴住居、井戸、窓、土器	土器窓、須恵器、赤繪土器、カラマツ、陶器皿、瓦、瓦片火鉢形、土鍬	平安・中世
13	第13次調査	平成6年度 高崎地区	土器	須恵器、瓦	不明
14	第14次調査	平成6年度 高崎地区	窓	土器窓、須恵器、瓦	平安時代
15	第15次調査	平成6年度 高崎地区	窓穴住居、土器	土器窓、須恵器	平安時代
16	第16次調査	平成7年度 高崎地区	獨立柱建物、窓穴住居、土器	土器窓、施釉陶器、円面鏡、軋川鏡	平安時代
17	第17次調査	平成7年度 高崎地区	獨立柱建物、窓穴住居、土器	土器窓、須恵器、青磁、石製模造品、永楽造宝	古墳・奈良・平安時代
18	第18次調査	平成7年度 豊ヶ谷地区	窓、土器、柱穴	土器窓、須恵器、赤繪土器	古代
19	第19次調査	平成8年度 豊ヶ谷地区	獨立柱建物、窓穴住居、土器	萬丈文器、土器窓、須恵器、铁鍊、青磁、白磁、かわらけ	奈良・良・平安時代
20	第20次調査	平成8年度 高崎地区	獨立柱建物、土器	土器窓、須恵器、石器	古代
21	第21次調査	平成8年度 高崎地区	窓穴住居、土器	土器窓、須恵器、瓦	平安時代
22	第22次調査	平成9年度 高崎地区	窓穴住居、窓、土器	土器窓、須恵器、赤繪土器、瓦、砥石	平安時代
23	第23次調査	平成9年度 豊ヶ谷地区	窓、土器	土器窓、須恵器、青磁、中世陶器、近世陶器、瓦、古鏡	平安・中世・近世
24	第24次調査	平成9年度 高崎地区	土器、窓、土器、小溝状遺構	土器窓、須恵器、瓦、石器、古鏡	平安時代
25	第25次調査	平成2年度 高崎地区	遺物包含層、糞		古代・中世
26	第26次調査	平成3年度 高崎地区	窓、土器		不明

第1図 高崎遺跡調査区一覧



第2図 調査区位置図

## IV. 調査成績

### 1. 基本層序

- I層 現代の表土である。締まりの弱い暗褐色土(10YR3/4)を主体とし、厚さは調査区南側で約20cmである。
- II層 調査区全域に認められる、厚さ10~15cmの層である。締まりのある褐色土(10YR4/6)を主体とし、黄褐色土が斑状に混入する。土師器、須恵器、瓦などが多く出土しているが、プラスチック片やガラスの破片も混在している。
- III層 遺構検出面である。締まりの強い黄褐色粘質土層(10YR5/6)を主体とする。層の厚さは調査区北側で約40cmである。

a層 調査区北東部の狭い範囲で確認した堆積層である。Ⅲ層上面に堆積し、Ⅱ層に覆われる。締まりの強いにぶい黄橙色土(10YR6/4)を主体とし、灰白色火山灰がブロック状に多く混入する。土師器、須恵器、赤焼き土器の小破片が出土している。

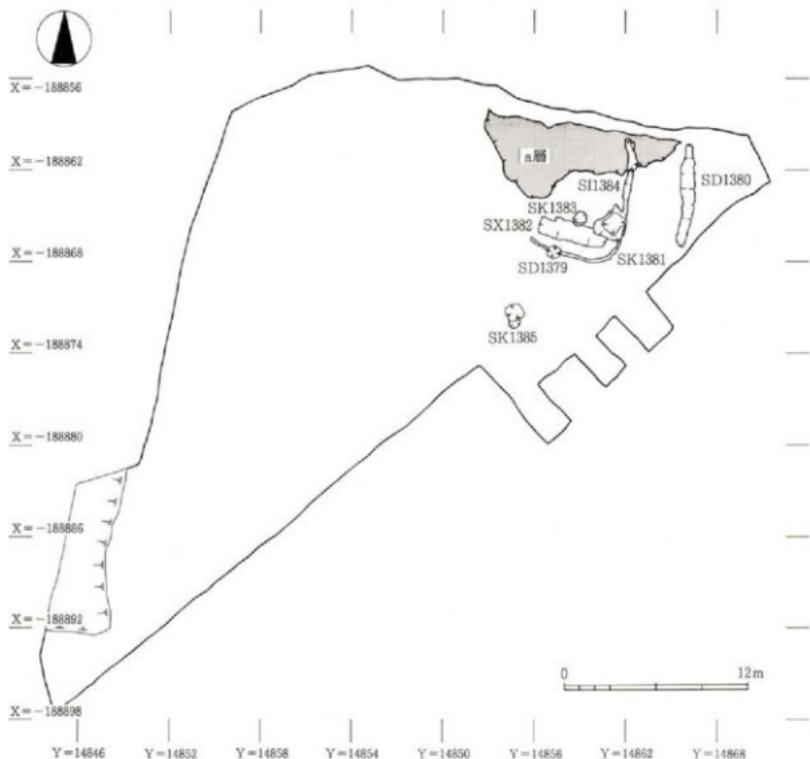
## 2. 発見した遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構には、竪穴住居1軒、土壙3基、溝2条、その他の遺構1基がある。以下、これらの概要について説明する。

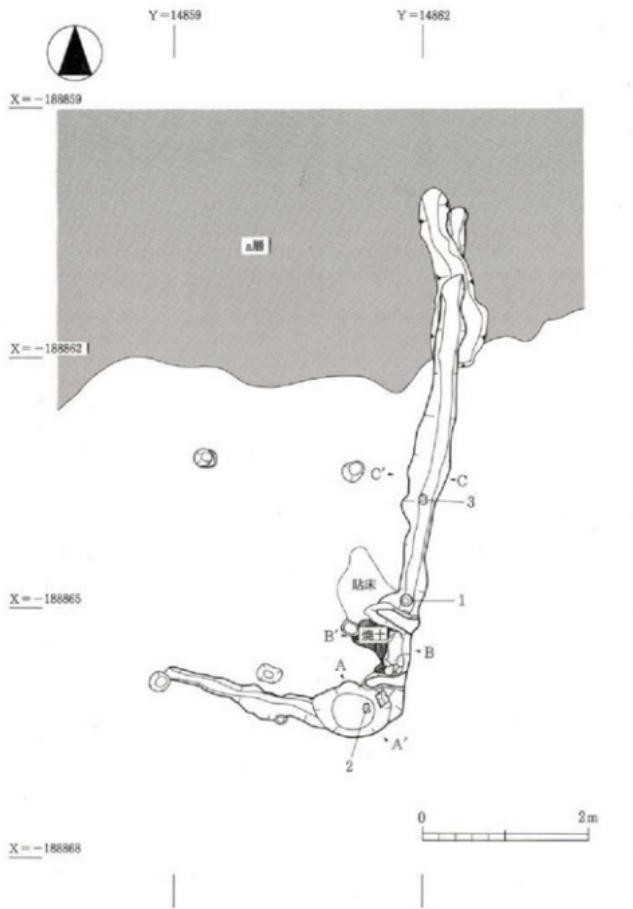
### [竪穴住居]

SI 1384

調査区東部で発見した竪穴住居である。SK 1381、SD 1379、SX 1382と重複しそれらよりも古い。また、a層とも重複関係があり、それよりも新しい。後世の削平により上面の大半が破壊されており、東・南側の周溝とカマド側壁および貼り床の一部が残存するのみである。住居の規模については明らかでないが、



第3回 遺構全体図



第4図 SI 1384住居

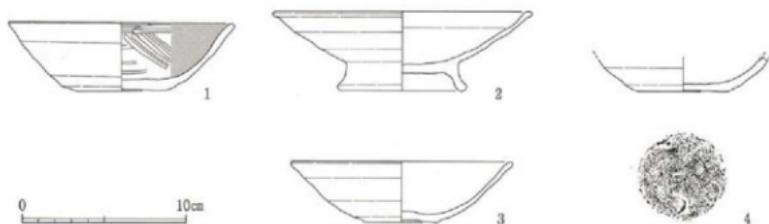
比較的残存状況の良い東辺で計ると約5.8mである。方向については、東辺周溝の中軸で測ると発掘基準線に対して北で約8度東側に傾いている。

**周溝**：住居東辺および南辺の一部で確認している。規模は東辺で計ると上幅28~43cm、下幅14~18cm、深さ15~18cmである。周溝底面のレベルでは、南辺西端部から東辺北端部に向かって低くなっている。その比高差は約30cmである。断面を見ると壁側は垂直気味に掘り込まれているのに対して、住居内では非常に緩やかな立ち上がりを示している。底面にはさほど凹凸はみられない。埋土は1層であり、締まりの強い黄褐色土を主体としている。なお、この周溝は住居南東隅で梢円形に膨らんでおり、南辺周溝の底面より約10cm低く掘り込まれている。断面は壁側が垂直に掘り込まれているのに対して、住居内では緩やかに立ち上がる。埋土は2層に区別できる。第1層は締まりの強い黄褐色土であり、炭化物が粒状に混入する。第2層は締まりのやや弱い褐色土であり、炭化物が粒状に多く混入している。

**カマド**：住居南東部で発見した。煙道は確認できなかったが、左右の側壁と燃焼部および側壁下に敷かれた石が残存していた。側壁は黄褐色土を主体とする粘質土で貼り付けられている。残存する規模は側壁の内面で計ると住居壁側で48~52cm、焚き口側で66~86cmであり、高さは北側の側壁で7cmを確認するのみである。燃焼部および側壁下に敷かれた石は周溝掘削後に設置されたものである。幅25~30cmほどの石を敷き並べて周溝をふさいでおり、カマド南側壁の下では周溝内にも同様の石が埋められていた。

**貼り床**：カマド北側壁付近に僅かに残存している。締まりの強い褐灰色土を主体とし、黄褐色粘質土が斑状に若干混入する。

**出土遺物**：貼り床直上から赤焼き土器杯、周溝埋土から土師器杯、甕、赤焼き土器杯・高台杯が出土している。



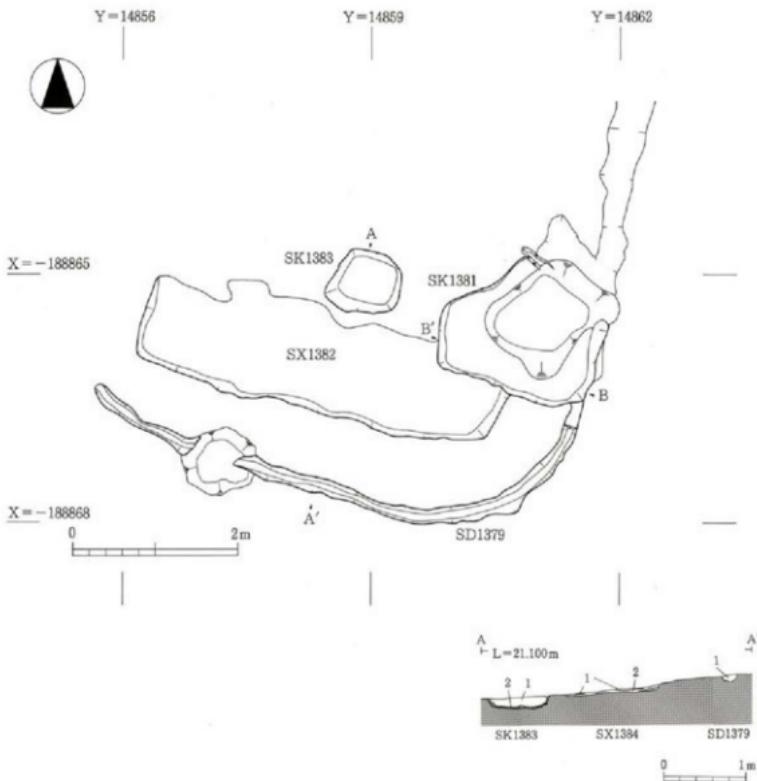
番号	遺物名	層位	特　　徴	口径	底径	器高	登録番号
1	土師器・杯	東辺周溝・第1層	外側：ロクロナデ、底部：回転糸あり、内側：ヘラガキ→黒色処理	13.5 (15.4)	5.4 7.4	4.2 5.8	R-1 R-4
2	赤焼き土器・高台杯	南東周溝・第2層	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸あり	(13.0)	4.4	3.7	R-39
3	赤焼き土器・杯	東辺周溝・第1層	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸あり				
4	赤焼き土器・杯	貼り床直上	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸あり				R-2

第5図 SI 1384出土遺物

### 〔土壤〕

#### SK 1381

調査区東部で発見した土壤である。SI 1384・SD 1379・SX 1382と重複しそれらよりも新しい。上面は後世の削平によりその大半が失われており、北東部から中心部にかけては木の根によって大きく破壊されている。平面形は不整形であり、規模は長軸約1.9m、深さ約0.23mである。壁は残存状況の良い東側では緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けることができる。第1層は締まりの弱い黄褐色土である。第2層は締まりは弱いものの僅かに粘性のある褐色土であり、炭化物がブロック状に混入している。遺物は第1層より土師器、赤焼き土器の小破片が出土している。



第6図 SD 1379・SK 1381・1383・SX 1382



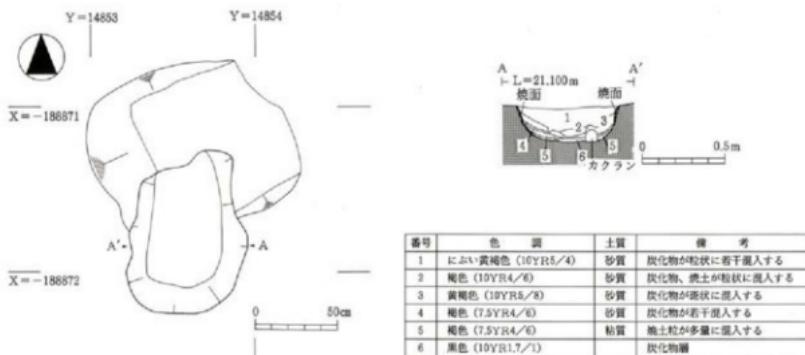
第7図 SK 1381断面図

### SK 1383

調査区東部で発見した土壤である。他遺構との重複関係はない。平面形は概ね方形であり、東西0.7~0.8m、南北0.5~0.7m、深さ約0.15mである。断面は逆台形であり、底面は平坦に掘り込まれている。埋土は2層に分けることができる。第1層は締まりの強いにぶい黄褐色土を主体とし、明黄褐色土がブロック状に、炭化物が斑状に混入している。第2層は炭化物層であり、土壤の底面および壁際にはほぼ均等に認められる。なお、本土壤では全ての壁が赤褐色に硬化しているにもかかわらず、底面にはそのような状況は確認できなかった。遺物は第1層から土師器杯の小破片が1点出土している。

### SK 1385

調査区中央部の南東よりで発見した土壇である。他遺構との重複関係はない。後世の削平により北半部が底面まで破壊されていた。平面形は楕円形と推定され、残存する規模は東西0.5~0.6m、南北0.8~1.0m、深さ約0.2mである。断面は幅の広い「U」字状であり、底面はほぼ平坦に掘り込まれている。埋土は6層に分けることができる。第1~3層は締まりのある黄褐色土・褐色土を主体としており、炭化物・焼土が粒状に若干混入している。第4・5層は褐色土を主体としているが、赤褐色の焼土ブロックが多量に混入している。第6層は炭化物層であり、底面に均等に認められる。なお、本土壇では全ての壁が赤褐色に硬化しているにもかかわらず、底面にはそのような状況は確認できなかった。遺物は赤焼き土器の破片が1点出土している。



第8図 SK 1385

### 〔溝〕

#### SD 1379

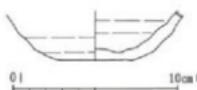
調査区東部で発見した東西から南北に屈曲する溝である。SI 1384・SK 1381と重複し、それらよりも古い。残存する長さは約6.4mあり、上幅0.1~0.3m、下幅0.06~0.08m、深さは0.1~0.2mである。断面は「U」字状であり、底面には凹凸は認められない。底面のレベルについては、東西方向のものでは西側から東側に向かって約10cm低くなっている。南北方向のものでは南側から北側に向かって約4cm低くなっている。埋土は1層である。にぶい黄褐色土を主体とし、黄色土および炭化物が粒状に若干混入する。遺物は西端部より赤焼き土器碗が出土している。



第9図 SD 1379出土遺物

## SD 1380

調査区東部で発見した南北方向の溝である。長さ約6.7m、上幅0.6~1.0m、深さ0.1~0.2mであり、底面には凹凸が顕著に認められる。底面レベルは南側から北側に向かって低くなっている。その比高差は0.8mである。埋土は1層であり、締まりの強い褐色土（10YR5/1）を主体としている。遺物は赤焼き土器杯が出土している。



基号	遺物名	層位	特徴	口径	底深	高さ	登録番号
1	赤焼き土器・杯	第1層	内外面 ロクロナゲ 底部 回転あさり		4.4		R-5

第10図 SD 1380出土遺物

### 〔他の遺構〕

#### SX 1382

調査区東部で発見した遺構である。SI 1384・SK 1381と重複し、前者よりも新しく後者よりも古い。残存状況は非常に悪く、南部で僅かに壁の立ち上がりが確認できるのみである。平面形は方形と推定され、残存する規模は南辺で長さ約4.3m、深さ0.1mである。埋土は2層に分けることができ、いずれもにぶい黄褐色土を主体としている。出土遺物には土師器、赤焼き土器があるが、すべて小破片である。

## V. まとめ

今回発見した遺構には、堅穴住居1軒、土壙3基、溝2条、その他の遺構1基がある。このうちSI 1384、SK 1381、SD 1379、SX 1382に重複関係があり、SD 1379→SI 1384→SX 1382→SK 1381という新旧関係を確認している。

次に各遺構の年代について検討する。SI 1384は灰白色火山灰を混入するa層よりも新しい遺構である。a層に混入する火山灰は10世紀前葉に降下したものとされており、本住居の構築年代の上限を示すものと考えられる。一方、出土遺物をみると床面から赤焼き土器、周溝埋土からロクロ使用の土師器、赤焼き土器が出土している。赤焼き土器を伴う土器群については、多賀城跡出土土器のうち「E群・F群土器」段階とされており、9世紀末~10世紀代の年代が与えられている。<sup>(4)</sup> したがって、本住居の年代はa層との関係から火山灰降下以降であり、遺物の組み合せや出土状況からみても概ね10世紀代のものと推測できる。

SD 1379は新旧関係でSI 1384よりも古い溝であるが、埋土から赤焼き土器碗が1点出土していることから、ここでは10世紀代のものと考えておきたい。

その他SK 1381、SX 1382はSI 1384よりも新しいことからそれ以降のものであり、SK 1385、SD 1380については、細片ではあるが赤焼き土器が出土していることから10世紀以降のものと考えられる。

(1) この火山灰の降下年代については、「多賀城跡第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』(1992)の見解に従った。

(2) 本書中で赤焼き土器としたものは、宮城県多賀城跡調査研究所で須恵系土器と呼ばれているものと同一のものである。また、今回出土したものはいずれも橙色あるいは黄褐色を呈するものであり、10世紀前葉以降に一般的に認められるものである。

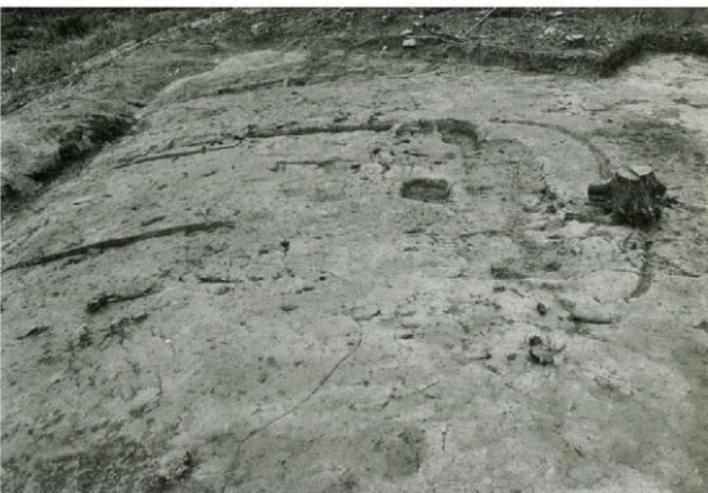
(3) 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要VII』1980

(4) E群、F群土器の年代観については、「多賀城跡第60次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』(1992)の見解に従った。

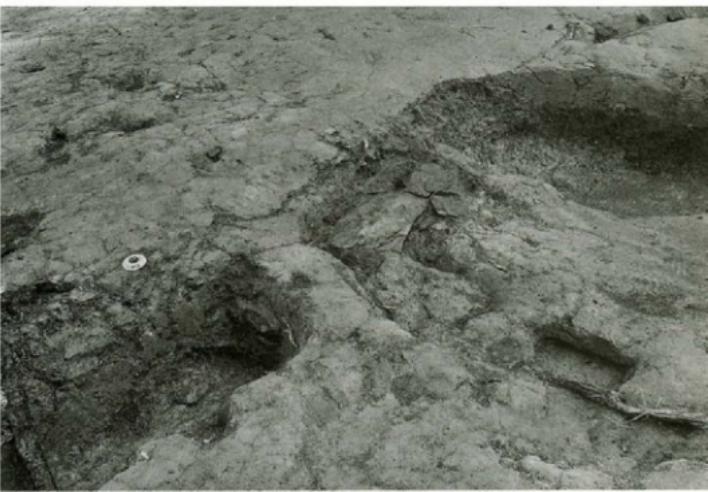
調査区全景（東より）

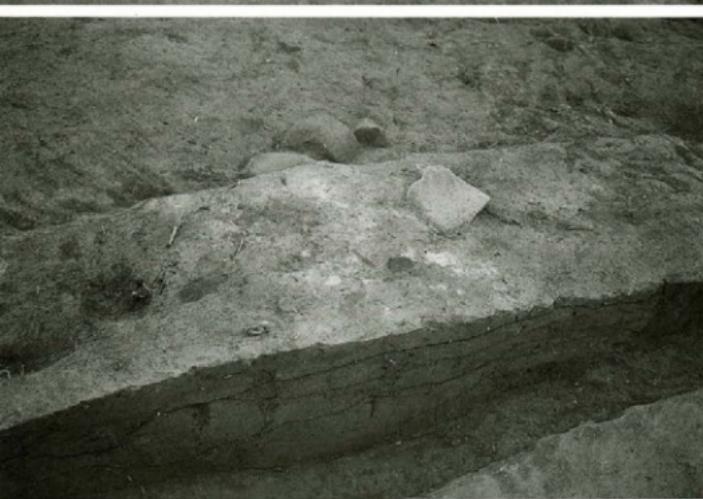


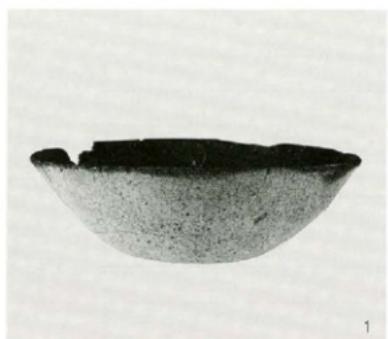
SI 1384（西より）



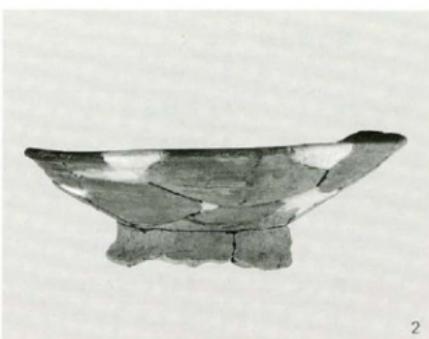
SI 1384カマド（北西より）







1



2



3 a



4 a



3 b



4 b

出土遺物

- |              |           |           |
|--------------|-----------|-----------|
| 1. 土師器杯      | SI1384周溝  | (第5図1) R1 |
| 2. 赤燒き土器高台付杯 | SI1384床直上 | (第5図2) R4 |
| 3. 赤燒き土器杯    | SI1384周溝  | (第5図4) R2 |
| 4. 赤燒き土器碗    | SD1379    | (第9図1) R5 |

報告書抄録

ふりがな	たかさきいせき							
書名	高崎遺跡							
副書名	第22次調査							
シリーズ名	多賀城市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第52集							
編著者名	武田健市・堀口和代							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 TEL022-368-0134							
発行年月日	西暦1998年3月25日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
高崎 (第22次)	多賀城市 高崎一丁目	市町村	遺跡番号	18	018 38度 17分 24秒	141度 00分 ~ 11秒	19970414 19970630	1,000 宅地造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高崎 (第22次)	集落	平安	堅穴住居、土壤、溝	土師器 赤焼き土器		10世紀の堅穴住居を 発見		

---

多賀城市文化財調査報告書第52集

高 崎 遺 跡

—第22次調査報告書—

平成10年3月25日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 有限会社工陽社

塩釜市尾島町8-7

電話 (022) 365-1151